

かぜ またさぶらう
風の又三郎

みやざわけんじ
宮沢賢治

九月一日

どつどつ どどうど どどうど どどう、

青いくるみも吹きとばせ

すっぱいかりんもふきとばせ

どつどつ どどうど どどうど どどう

谷川の岸に小さな学校がありました。

教室はたった一つでしたが生徒は一年から六年までみんなありました。運動場もテニスコートのくらいでしたがすぐうしろは栗の木のあるきれいな草の山でしたし、運動場の隅にはごぼごぼつめたい水を噴く岩穴もあつたのです。

さわやかな九月一日の朝でした。青ぞらで風がどうと鳴り、日光は運動場いっぱいでした。黒い雪ばかまをはいた二人の一年生の子がどてをまわって運動場にはいつて来て、まだほかに誰も来ていないのを見て、

「ほう、おら一等だぞ。一等だぞ。」

とかわるがわる叫びながら大よろこびで門をはいつて来たのですが、ちよつと教室の中を見ますと、二人ともまるでびっくりして棒立ちになり、それから顔を見合わせでぶるぶるふるえました。がひとりはどうとう泣き出してしまいました。というわけは、そのしんとした朝の教室のなかにどこから来たのか、まるで顔も知らないおかしな赤い髪の子供がひとり一番前の机にちゃんと座っていたのです。